

27 作者の異なる二枚の《岩窟の聖母》

2019

真鍋友範

二枚の《岩窟の聖母》。かなり画風が異なるのに、多くの人は何故双方をレオナルド作と考えているのだろうか。

例えば、聖母の顔に注目したい。

同じ作者が描いたのなら、描き直してもその個性は表出されるものだ。【両作品の聖母の表現は全く異なる。】

しかし、多数派が常に正しいとは限らないのだ。

現実にはルーブル版をレオナルド作と考え、ロンドン版を弟子の作品と考える美術史研究者が多いが、これは全く真逆の判定であろう。

近年のナショナル・ギャラリーによるエックス線調査で、ロンドン版はほぼ全てレオナルドの真筆との科学的判定がでたからだ。

この事実から推測すると、ルーブル版はレオナルド工房で描かれているが、実際に描いた画家はレオナルドの複数の弟子達である可能性は高い。

その理由を考察する。

理由1 ルーブル版の作家は描画力がない。

その不出来である具体的な箇所は、以下だ。

- ① 聖母の右腕が少々長すぎる。
- ② 天使の指差す右手が巨大で天使とのバランスが悪い。
- ③ 天使の右足がとんでもない位置にある。

- ④ 天使の背中ラインが奇妙だ。姿勢が不明確。
- ⑤ 幼児の洗礼者ヨハネが空中に浮遊しているように見える。
- ⑥ 聖母の帯が胴部に巻き付いた帯に見えない。
- ⑦ 岩窟に差し込む光が聖母の顔には当たっているが、体幹部分にはある筈の光が当たっていない。通常描く人は常に光の方向を意識しているものだ。

この程度はデッサンを学んだ人なら誰でも気づきそうな箇所だ。つまり、レオナルドのデッサン力がこんなものかと驚いてしまう程の描写能力なのだ。

人体解剖迄して骨格や筋肉の組成迄学んだレオナルドが、このようなお粗末な絵画を描くとは信じられない。

ただし、ひとつ予想できる反論がある。

それはルーブル版が【18世紀にフランスの美術修復家によって元の板絵からキャンバスに移された】という史実だ。

【このときの修復技術が拙くて。オリジナルを大幅に損なった可能性が高い】、という反論だ。

一歩譲って、仮にそうだとしよう。だが、全面的に納得出来るものか。

まず、修復で描画上の位置が微妙にずれる可能性はあるか。これは可能性があるといえそう。

次に描画の内容は換えられるか。これは無いだろう。ルーブル美術館内の複数の専門家が見ている中で、これは出来ないだろう。

つまり、ルーブル版とロンドン版の描画上の大きい違いである【天使の指差す右手】と【水際を示す岩】の描写は修復前も修復後も存在していたと推測できる。

言い換えると、ルーブル版は早い段階から【洗礼の場面】が描かれた絵画なのだ。

しかし、【洗礼の場面】を描くと問題が発生する。

何故ならば、当時の《聖母無原罪御宿り信心会》が望む描画対象は、あくまで【無原罪の聖母】なのだ。無原罪の聖母を信仰し、且つその思想を広めたいと願っている信心会なのだ。そうであるにも関わらず、【洗礼の場面】を描いたなら、新約聖書のその場面に【聖母は存在しない】という矛盾に直面する。

だからこそ、レオナルドは、旧約聖書外典から《岩窟の聖母》描画画面を設定したに違いないのだ。

つまり、《ルーブル版》を描いた弟子の画家は、例え誰かに指示されて改作したにせよ、レオナルドの真意が解っていなかったのだ。

~~~~~